

研究ノート 1

<平成 21・22 年度 特別教育研究>

社会的視座を有するメディアの送り手をどう育てるか

— 送り手のメディア・リテラシー育成を巡る大学教育の役割 —

Reconsidering Media Course in Universities

— How Can the Students Understand the Media-related Problems

Through the Social Context

(研究メンバー)

五島幸一

Koichi Goshima

石田米和 ・ 大西誠 ・ 小田茂一 ・ 伊藤昌亮 ・ 小川明子

Yonekazu Ishida Makoto Onishi Shigekazu Oda Masaaki Ito Akiko Ogawa

*

*

- | | |
|--|------|
| 1. はじめに
Introduction | 五島幸一 |
| 2. イギリスにおけるメディア教育の現況
The State of Media Education in England | 伊藤昌亮 |
| 3. 制作実習環境とカリキュラム上の位置づけ
Environment of the Media Production Training
and their position on the curriculum | 小田茂一 |
| 4. メディア教育と社会的視座の育成
Media education for fostering sociological perspective | 小川明子 |
| 5. まとめ—成果と今後の課題
Summary and Discussion | 五島幸一 |

1. はじめに

五島幸一

Introduction

本学では、2010年度からメディア・プロデュース学部が新設され、メディア・コンテンツ制作やプロデュースを担う人材の育成が始まった。本学部の特徴は、メディアの現場の知と大学のアカデミックな知を融合したカリキュラムを提供していることである。具体的には、カリキュラムにおいて、メディアに関する理論の授業と制作を中心とする実践の授業を組み合わせることである。しかし、理論と実践の授業を効率的に組み合わせ、提供することは容易ではない。

今日のメディア領域におけるハードの進歩のスピードに並行して授業を展開することは、人的資源および設備の面から無理がある。また、技術習得にのみ焦点を当てた授業の提供は大学教育と大きく異なる。さらに、メディア業界を巡る状況は浮き沈みが激しいため、それに引きずられて、教育内容が業界の一時的な動向に偏ってしまう恐れがあり、送り手、作り手としての倫理観の欠如や、社会の矛盾に対する無関心を生み出す危険性がある。その危険性を回避するためには、しっかりと理論面を学ぶことができる体制にすることが重要だと思われる。

そこで、本プロジェクトでは、海外における先進的なメディア表現者の育成、またジャーナリズム教育の事例を調査し、我が国における大学でのメディア・リテラシー教育/メディア教育も参照しながら、メディア教育のカリキュラムを検討する。そこで育成したい人材とは、社会的視座と倫理観を有した送り手である。

このような企画に沿って、実際に訪問した海外の大学は、21年度が北アイルランドにあるアルスター大学と英国のオックスフォード・ブルックス大学で、22年度はアメリカ合衆国にあるボストン大学とマサチューセッツ工科大学であった。それぞれの大学の教員と次の事項に関して具体的な意見交換をおこなった。

①カリキュラム ②設備および機材 ③教育体制（ティーチングスタッフ）

④人材の育成 ⑤理論面の教育と実習教育との融合

いずれの大学とも差異はあるものの、メディアに関する理論の授業を中心にして、映像制作関連のスキルの授業をうまく組み入れているのが明らかになった。アルスター大学とは以前大学院レベルでの共同講座として、「インターナショナル・メディア・スタディーズ」を開講していたいきさつもあり、メディア・スタディーズの教育内容、教育目標などは理解していたため、同大学の教員との話し合いもスムーズであった。オックスフォード・ブルックス大学は本学との交流提携校であり、ある程度事情は理解していたが、英語教育の交流提携であったため、メディア教育とは異なる点があった。しかし、同大学の交流担当の教員からコミュニケーション教育やメディア教育に関する授業の展開などについて話を聞くことができ、英語教育以外での学生交流の可能性が見えてきた。このアルスター大学とオックスフォード・ブルックス大学との教育内容の違いはあり、アルスター大

学はクリティカルな分析をするカルチュラル・スタディーズから派生したメディア・スタディーズを中心としている。一方、オックスフォード・ブルックス大学ではコミュニケーション学、とくにマスコミュニケーション論を教えている。また、実習に関しては、両大学ともクラスを設けているが、施設および教育内容ではアルスター大学の方が充実している。それは、アルスター大学のメディア・スタディーズの卒業生の多くがメディア関連企業への就職を希望しているとも関係がある。一方、オックスフォードブルックス大学の卒業生は様々な分野での就職が考えられているので、マスコミュニケーション論をはじめ、幅広い知識を提供しているともいえる。

22年度に訪問したアメリカ合衆国のボストン大学は、初めての訪問であった。この大学を視察した理由は、メディアに関する教育内容が充実していること、教員に新聞社などマスコミ関連の企業で働いていた教員がいることであった。学部長も新聞社出身であり、ピューリッツア賞を受賞した実績のある人であった。教育内容は、情報を送り出す人材の育成を強く考えていて、そのための知識や倫理などに関係した授業を展開している。マサチューセッツ工科大学では、とくに大学院レベルの授業について話を聞いた。全米屈指の同大学では、メディアといっても工学系よりのものであり、本学の目指す教育内容とは異なると考えた。しかしながら、同大学が全世界の大学に提案している「オープン・コースウェア」構想について話を聞くことができ、今後の大学教育の課題でもある認識をもった。

21年度および22年度と海外の大学を訪問して、メディア教育のあり方を視察して、各大学の取り組み方を知ることができた。また、私どもに多くの事を考えさせる刺激を与えてくれたように思う。本稿では、訪問した大学の内容について概観し、今後の課題を検討していきたい。

2. イギリスにおけるメディア教育の現況

伊藤昌亮

The State of Media Education in England

2.1. はじめに

2009年10月から11月にかけて私たちはイギリスの2つの大学を訪問し、メディア教育事例に関する調査を行った。その目的は、カリキュラムポリシーやディプロマポリシーから設備・機材・組織・体制に至るまで、先進的なメディア教育事例の現況を詳細に探ることである。

イギリスはカルチュラル・スタディーズ発祥の地であり、アメリカと並ぶメディア研究、メディア教育の世界的な中心地の一つである。そのためそこでは、ジャーナリズム研究やマスコミュニケーション研究を起点とするアメリカ型のものとは異なるタイプのメディア教育が実践されていると考えられる。

そうした中で私たちは特に、以下の2点に強い関心を持って調査に臨んだ。第一に、従来型のマスメディア中心の教育と新たなデジタルメディア志向の教育とをそこではどのように統合させているか、第2に、理論面の教育と実習面の教育とをそこではどのように統合させているか、という点である。

以下、視察の内容とその結果を報告する。

2.2. 視察の概要

■視察者：

五島幸一・小田茂一・伊藤昌亮

■視察先：

・University of Ulster; Faculty of Arts; School of Media, Film and Journalism; Colerain, Northern Ireland

・Oxford Brookes University; Communication, Media and Culture Program; Oxford, UK

■視察日程：

2009年10月29日～11月5日

■視察目的：

メディア教育事例に関する情報収集と意見交換のため。特に以下の点について具体的な情報を得ることを目的とした。

1. どのようなカリキュラムを提供しているか。
2. どのような設備・機材を提供しているか。
3. どのような体制（ティーチングスタッフ・テクニカルスタッフ）で取り組んでいるか。
4. どのような人材を育成することを目的としているか。

5. 理論面・実習面の教育をどのように整合させているか。

2.3. 報告

2.3.1 どのようなカリキュラムを提供しているか

University of Ulster では、School of Media, Film and Journalism が以下の4つのコースに分かれている。

- ・Media Studies and Production Course : 映像・写真・音声系
- ・Interactive Media Arts Course : CG・ウェブ系
- ・Film Studies Course : 映画系
- ・Journalism Course : 新聞・出版系

これらのうち、Media Studies and Production Course と Interactive Media Arts Course は Skillset Media Academy の指定を受けている。Skillset Media Academy とは、イギリスのメディア産業の業界団体が指定したメディア・プロフェッショナルのための教育拠点である(世界に17カ所、北アイルランドの university としては1カ所)。

そのためこれら2つのコースでは、Skillset の要件に沿ってカリキュラムが組まれている。特に理論面・実習面の教育のバランスが配慮されている。理論面・実習面ともに科目が充実しているうえ、たとえば dissertation には卒業論文と卒業制作の両方が必要となる。

一方、Film Studies Course と Journalism Course (学部の場合) では理論面の教育が中心である。特に Film Studies Course はロンドンの Royal Film Academy と競合するのを避けるため、理論面に特化しているという。

University of Ulster では全般に、理論面のベースとなっているのはカルチュラル・スタディーズである。さまざまな分野における「文化実践の政治学」を問うようなものが多い。その延長上に、特にアイルランドの社会事情を扱うようなものも多い。

一方、Oxford Brookes University では理論面の教育が中心である。そのベースとなっているのは、特に言語学に基づくコミュニケーション論である。加えて歴史社会的なメディア論、社会心理学的なコミュニケーション論などもある。実習科目はジャーナリズム系・オンライン系など、専用の設備・機材をそれほど必要としないものに限られる。

いずれの大学とも、実習科目の定員は20~30名程度である。講義科目の場合には150名を超えるようなものも多い。

表1、2、3、4、5を参照のこと。

2.3.2 どのような設備・機材を提供しているか

University of Ulster では学部専用の施設が充実している(映像スタジオ、音声スタジオ、各編集室、コンピュータールーム4室、全体でPC80台)。それらは放送系からデジタル系まで、さまざま

な形態のメディアに過不足なく対応している（映像系・写真系・音声系・プリント系・オンライン系など）。

ただしハードウェア、ソフトウェアは必ずしも最新のものではなく、最高スペックのものでもない。また特別なものや高価なものが用意されているわけでもない（3D CG系などは一切ない）。むしろ標準的なものが揃い用意されている。

テクニカルスタッフ（テクニシャン）の数は少ない。映像スタジオには常駐で1名、音声スタジオには常駐で1名、コンピュータルームには全体で2名である。コンピュータルームにはスタッフは常駐せず、トラブル対応と保守に対応するのみである。

そのためコンピュータルームの利用は、基本的に学生の自主運用に任されている。平日には8時から22時まで自由に利用可能である。休日でもリクエストベースで利用可能となる。

一方、Oxford Brookes Universityには学部専用の施設は用意されていない。情報システム部門が提供する全学共通のコンピュータルームを使用している。

表6を参照のこと。

2.3.3 どのような体制（ティーチングスタッフ・テクニカルスタッフ）で取り組んでいるか

University of Ulsterでは、School of Media, Film and Journalismの4コース全体として専任ティーチングスタッフは14名、テクニシャンは4名いる。非常勤のティーチングスタッフは10名強いる。専任ティーチングスタッフのバックグラウンドはさまざまである。写真家・新聞記者・ドキュメンタリー作家など、実践者としてのキャリアを持つ者も多い。

Oxford Brookes Universityでは、Communication, Media and Culture Programとして専任ティーチングスタッフは6名いる。非常勤のティーチングスタッフは10名弱いる。専任ティーチングスタッフのバックグラウンドはやはりさまざまである。アカデミックプロパーの者が多いが、コース長は元ウェブデザイナーだという。

2.3.4 どのような人材を育成することを目的としているか

University of Ulsterでは、実際にメディア産業に就職し、メディア業界で仕事をしようとする人材、いわば「メディア・プロフェッショナル」を育成することを目的としている。実際にBBCのほか、中央・地方のテレビ局・新聞社・出版社・インターネット企業などに就職する学生がそれなりに多い。

一方、Oxford Brookes Universityでは、一般企業の“communication and media sector”、つまり企業と社会の間を仲立ちするための部門で仕事をしようとする人材、いわば「コミュニケーション・プロフェッショナル」を育成することを目的としている。

2.3.5 理論面・実習面の教育をどのように整合させているか

特にUniversity of UlsterのMedia Studies and Production Courseでは、理論面・実習面の教

育のバランスが慎重に配慮されている。そのため、カリキュラム上に以下のような特色が見られる。

- ・実習科目は細分化されておらず、科目数も少ない（1年次にはMedia Practice Foundation 1 & 2のみ、2年次にはIndependent Practical Studies 1 & 2のみ、3年次にはすべて理論科目とのカップリング）。一方で理論科目は細分化されており、科目数も多い。
- ・理論科目と実習科目とのカップリングで構成されている科目が多い（3年次、Film, Television and Ireland, Photography and the Mass Media, Irish and International Documentary）。dissertationもこの形式で構成されている（Written DissertationとDissertation by Practice）。
- ・「理論から実習へ」という流れではない。むしろ「実習の基礎を押さえたうえで理論的發展へ」という流れが想定されている。つまり実習科目そのものの中に発展性はなく、技術力や制作力そのものを個別のジャンルの中で伸ばすことが目指されているわけではない。それらはいくまでも一種の素養として、基礎的なレベルで養成されるのみに留められる。つまりあくまでも理論科目とのカップリングの中で、特定の主題を發展させていくための素養の一環として位置づけられている。
- ・実習科目の内容は、むしろ学生の自主運用に任されている（Media Practice Foundation 1 & 2, Independent Practical Studies 1 & 2）。
- ・理論科目の内容は、カルチュラル・スタディーズをベースにさまざまな分野における「文化実践の政治学」を問うようなものが多いため、実践の局面に接合しやすい。
- ・一方で Interactive Media Arts Course の場合には、比較的実習面に偏ったカリキュラムになっている。逆に Film Studies Course と Journalism Course、および Oxford Brookes University の場合には、理論面に偏ったカリキュラムになっている。

2.3.6 その他

University of Ulster では、メディア業界との間のインターンシップ制度が充実している。たとえば2008度の夏休みにはBBCとの間で修士課程の学生8人、地元のいくつかの新聞社との間で学部学生60人ほどがこの制度を利用している。そこでの活動が就職に結びつくようなケースも多い。

2.4. 考察

2.4.1 マスメディア系・デジタルメディア系の教育をどのように整合させているか

特に University of Ulster の Media Studies and Production Course では、テレビなど主流のマスメディアを扱う Media Studies and Production Course を中心に、より「古い」マスメディア、すなわち映画と新聞を扱う Film Studies Course と Journalism Course、そして「新しい」デジタルメディアを扱う Interactive Media Arts Course という4つのコースを設けている。その中で「古い」メディアを扱うコースでは理論中心、「新しい」メディアを扱うコースでは実践中心、主流のメディアを扱うコースでは理論面・実践面のバランスに配慮した教育を提供している。またコース間

に共通科目を設けたり、複数コースを対象とする科目を設けたりしている。こうしたカリキュラム上の配慮によって、マスメディア系・デジタルメディア系の教育をバランスよく整合させていると言えるだろう。

2.4.2 理論面・実習面の教育をどのように整合させているか

日本で自明視されているような「理論から実習へ」という流れではなく、むしろ「実習から理論へ」、より正確に言えば「実習の基礎を押さえたうえで理論的發展へ」という流れが想定されている。メディアの技術基盤の細分化が進み、さらにその技術革新が著しく進む昨今の状況では、実習を發展させていくことは細分化された技術を追求していくことにつながるため、メディア教育という一つの枠組みの中でそのすべてを実現することは不可能であるとともに、本質的に不毛である。それよりもむしろ、表現者としての基礎的な素養を踏まえたうえで、メディア社会の多様な事象に批判的に目を向けていくための本質的な思考力や分析力を養うことが重要だろう。

表1. カリキュラム表1

University of Ulster:

Media Studies and Production Course

科目名	履修年	必修?	実習?
Media, Culture, Identity 1	1 前	必修	
Media Practice Foundation 1	1 前	必修	実習
Introduction to Film Studies	1 前	必修	
Media, Culture, Identity 2	1 後	必修	
Media Practice Foundation 2	1 後	必修	実習
Photography and Visual Culture	1 後	必修	
Independent Practical Studies 1	2 前	必修	実習
News and Journalism	2 前		
Psychoanalysis and Film	2 前		
Aesthetics and Politics	2 前		
History of Irish Photography	2 前		
Independent Practical Studies 2	2 後	必修	実習
Television and Popular Culture	2 後		
History of Hollywood Cinema	2 後		
Mapping the City	2 後		
Ethics and the Media	2 後		
Research Methods	3 前	必修	
Film, Television and Ireland	3 前		
Film, Television and Ireland (Screenwriting)	3 前		実習
Photography and the Mass Media	3 前		
Photography and the Mass Media (Practice)	3 前		実習
Irish and International Documentary	3 前		
Irish and International Documentary (Practice)	3 前		実習
Broadcast Journalism	3 前		
Written Dissertation	3 後	必修	
Final Year Project or Dissertation by Practice	3 後	必修	実習
Children and Screen Culture	3 後		
British Cinema	3 後		
Reporting International Conflict	3 後		
Genders, Sexualities and Film	3 後		

表2. カリキュラム表2

University of Ulster:

Interactive Media Arts Course

科目名	履修年	必修?	実習?
Media, Culture, Identity 1	1 前	必修	
Digital Imaging	1 前	必修	実習
Introduction to Film Studies	1 前	必修	
Media, Culture, Identity 2	1 後	必修	
Motion Graphics	1 後	必修	実習
Photography and Visual Culture	1 後	必修	
Independent Practical Studies	2 前	必修	実習
Designing for Interactivity	2 前	必修	実習
Aesthetics and Politics	2 前	必修	
Media Arts Major Project 1 (Narrative and New Media)	2 後	必修	
Media Arts Major Project 2	2 後	必修	実習
Television and Popular Culture	2 後	必修	
Research Methods	3 前	必修	
Interactive Media Arts	3 前	必修	実習
Film, Television and Ireland	3 前		
Photography and the Mass Media	3 前		
Written Dissertation	3 後	必修	
Final Year Major Project	3 後	必修	実習
Media Arts Dissertation by Group Practice	3 後	必修	実習

表3. カリキュラム表3

University of Ulster: Film Studies Course

科目名	履修年	必修?	実習?
Introduction to Film Studies	1 前	必修	
World Cinemas	1 後	必修	
European Film: Images of WWII	2 前		
French Cinema since 1960s	2 前		
Psychoanalysis and Film	2 前		
Spanish Cinema	2 前		
European Literature and Film 1945-1975	2 後		
Mapping the City	2 後		
History of Hollywood Cinema	2 後		
The Border in Mexico and the US	2 後		
Latin American Film	3 前		
Film, Television and Ireland	3 前		
Irish and International Documentary	3 前		
British Cinema: Critical Issues	3 後		
European Literature and Film 1975-	3 後		
The French New Wave	3 後		
Children and Screen Culture	3 後		
Genders, Sexualities and Film	3 後		
Dissertation in Film Studies	3 後	必修	

表4. カリキュラム表4

University of Ulster, School of Media: Journalism Course

科目名	履修年	必修?	実習?
Media, Culture, Identity 1	1 前	必修	
Journalism Practice 1	1 前	必修	実習
Media, Culture, Identity 2	1 後	必修	
Genres of Writing	1 後	必修	実習
News and Journalism	2 前	必修	
Journalism and Media Law	2 前	必修	
Journalism Practice 2	2 後	必修	実習
Ethics and the Media	2 後	必修	
Research Methods	3 前	必修	
Broadcast Journalism	3 前	必修	
Photography and the Mass Media	3 前		
Irish and International Documentary	3 前		
Journalism Dissertation	3 後	必修	
Reporting International Conflict	3 後		

表5. カリキュラム表5

Oxford Brookes University:

Communication, Media and Culture Program

科目名	履修年	必修?	実習?
Understanding Communication	1 前	必修	
Understanding Media	1 前	選択必修	
Academic Literacies	1 後	必修	
Understanding Language	1 後	選択必修	
Independent Study	2 前後		(実習)
Methodology of Foreign Language Teaching	2 前後		
Intercultural Communication	2 前		
Broadcast News	2 前		実習
New Media and Youth Identities	2 前		
Print and Society	2 前		
Analyzing English Language	2 前		
Language, Culture and Globalization	2 前		
Forensic Linguistics	2 前		
Learning through Social Interaction	2 前		
Philosophy of Language	2 前		
Researching Communication	2 後	必修	
Persuasive Communication	2 後	必修	
Critical Media Literacies	2 後		
Design for Online Communication	2 後		実習
Writing Technologies	2 後		
Content, Design and Technology in Publishing	2 後		実習
Fiction and the Culture of Publishing	2 後		
Children and the Media	2 後		
Culture, Gender and Sexualitiy	2 後		
Dissertation	3 通年	必修	
Subject to Culture	3 通年		
Subject to Discourse	3 通年		
Interdisciplinary Dissertation	3 通年		
Psychology of Communication	3 後	必修	
Communicating Collective Identities	3 後		
Cities and Society	3 後		
Critical Discourse Analysis	3 後		
Wittgenstein' s Later Philosophy	3 後		

表 6. 実習用設備・機材一覧

University of Ulster: School of Media, Film and Journalism

施設	用途	機材	ソフトウェア	利用時間	管理
映像スタジオ 編集室	映像系 写真系	BBC仕様テレビカメラX3台 照明設備 ミキサー 暗室 デジタルビデオカメラ×12台 デジタルカメラ×14台 三脚×9台 マイク×13台 PC×15台	Premiere FinalCutPro AfterEffects Avid		常駐:テクニシャン1名
音声スタジオ 編集室	音声系	40トラックミキサー×1台 2トラックミキサー×2台 レコーダー×17台 PC	音声編集ソフトウェア 音響効果ライブラリ		常駐:テクニシャン1名
プロダクションラボ (A111)	プリント系 オンライン系 音声系 映像系(一部)	PC×30台 A3レーザープリンタ×1台	Photoshop Illustrator Flash Dreamweaver InDesign Audition Premiere (5台)		
ニュースルーム (B241)	プリント系 オンライン系 音声系	PC×20台 大型テレビモニター×2台 (ニュース放送用) A3レーザープリンタ×1台	Photoshop Illustrator Flash Dreamweaver QuarkXpress Audition		
プロダクションラボ (A238)	プリント系 オンライン系 音声系 シナリオ系	PC×5台 A3レーザープリンタ×1台	Photoshop Illustrator Flash Dreamweaver QuarkXpress Audition Final Draft	平日:8時~22時 休日:リクエストベース	常駐:なし 保守:テクニシャン2名
プロダクションラボ (A239)	プリント系 オンライン系 音声系 シナリオ系	PC×6台 A3レーザープリンタ×1台	Photoshop Illustrator Flash Dreamweaver QuarkXpress Audition Final Draft		

3. 制作実習環境とカリキュラム上の位置づけ

小田茂一

Environment of the Media Production Training and their position on the curriculum

メディア関連学部を持つイギリスのふたつの大学、アルスター大学（北アイルランド）とオックスフォード・ブルックス大学（オックスフォード）を見学した。

両大学でのカリキュラム構成は、制作実習面よりもむしろメディア論、コミュニケーション論、カルチュラル・スタディーズといった基礎学習や理論面にウエイトが置かれており、また、ふたつの大学それぞれに本学とは大きな違いがあるように思われた。

実習授業の扱いは、メディアについての基礎力を具体的に確認し、次の段階に進めていくものとして、映像、画像、テキスト、音声によるコンテンツ制作を実際に体験できるというかたちになっている（2校のカリキュラムの詳細については、伊藤レポートを参照のこと）。

とりわけアルスター大学には、地域メディア企業との日常的連携の強さが見られる。一部の在校生は、共同プロジェクトにも参加している。そして、かなりの卒業生が、地域の放送局「アルスター・テレビ（Ulster Television）」などに働く場を得ているようである。

3.1 実習系授業環境の違い

アルスター大学では理論系科目をベースとし、実習系科目はその補完学習としての位置づけでおこなわれている。今回の見学では、こうした実習系科目をおこなう3つの施設（紙面制作実習室、スタジオ+編集スペース、音声編集室）を見学し説明を受けた。

そのひとつは、学生がPC上で各自記事を書きニュース紙面の制作作業をおこなう場である。天気予報や、列車情報といった放送局や新聞社が日々おこなっている生活情報サービスについても、最新情報を得るための外部との直通ラインが設定されていた。履修者が作りあげた紙面や記事内容の報告や検証は、教室内の大型モニターに表示することによっておこなえるようになっていた。

次に、テレビ放送など実写による映像制作のためのスタジオと副調について説明いただいた。スタジオは、BBC規格に準じているとのことであった。しかし、スタジオのつくりや設備など、かなり年代を経たものに見えた。天井高は確保されているが、スタジオフロアには外光が入る設定となっているなど、多目的利用も想定されていたものと考えられる。副調には、中継現場などで使ったりする簡易なスイッチング卓が置かれているという状況で、スタジオ作業ができるというレベルにとどまっていた。本学の副調設備に比べても、さらに簡素で年式の古い機材が用いられていた。しかし以前の経験からも、BBCラジオ局などでも機材の更新はわが国の放送局と比べれば遅いように感じている。使い慣れた機材を使えるあいだは確実に継承していく伝統が重んじられているとみるべき

であろう。

映像編集用PCなど、ポスプロ機材はスタジオに隣接したスペース（前室）に設置されていた。本学のように、数十台レベルで並べられたPCに映像編集ソフトなどいくつかのアプリケーションをインストールし、様々な実習で共用していく多用途利用の体制とはなっていない。部屋の各隅にそれぞれ異なった編集ソフト（AvidやFinalCutなど）が入ったPCが一台ずつ配置されているという状況であった。映像編集に関しては、大人数が一斉に授業で使うというかたちには対応していないものと考えられる。スタジオ近くの小部屋に編集用PCを設置しているというこのような場の設定は、たとえばわが国のローカル放送局の現場などにみられる作業環境という印象を受けた。

今回の見学で、実際に学生による制作作業を見ることができたのは、音声作品制作の場である。10数台のPCが間を置いて配置された大部屋で、数人が自主的に音声素材のデジタル編集をおこなっていた。見学の際には映像編集をおこなっている学生を見ることはできなかったが、記事、映像、音声など制作内容にあわせ、別々の教室として場が設けられている。このことは、汎用PCを様々な作業に対応させながら施設を多目的活用していく本学における学習環境とは、異なる方向性である。見学をおこなった両校では、施設やリソース状況を踏まえながら厳選して実習科目をおこなっているように感じられた。本学にみられる実習科目拡張の流れとは、この点でも異なっている。

3.2 基礎学習重視か、制作実習重視か

制作される番組あるいは作品のレベルを決める大きな要素は、「企画・構成」力、さらには「取材」し、「判断」する力である。見学した両校では、このことを踏まえてメディアの仕事に持続的に携わっていくことを可能とする基礎学力をつけることにウエイトが置かれている。

しかし本学の場合は、カメラで撮影することやPC上でデジタル編集することが前面に出てきており、このための機材を用意することが一義的にとらえられている。これらは、作品としてかたちにする作業をおこなう上で必要であるが、大学におけるメディア表現研究において大きなウエイトを占める学習要件とは言えない。

たとえば、映像制作などにおいても編集用PCの用法の習熟は、まず企画・構成・取材力を身につけ、それをかたちにするための撮影法を学び、そのあとの仕上げの、編集作業段階に至って必要となるのではなかろうか。また、映像のつながりについての学習は講義科目において可能である。撮影についても同様である。こうした基礎知識があってはじめて、取材内容をどのように映像として切り取り、重ねていくかについての方針が見えてくる。カメラの撮り方やPC編集は、こうしたプロセスを重視することで必然的に習熟されていく。

イギリスの2校では、映像制作ばかりではなく、たとえばテキスト（記事）や写真、音声をベースにした作品制作を含め、コンテンツを作成するという点については、必要に応じて発展的な要素として取り組んでいくことを意識したカリキュラム構成となっているように見受けられた。また科目構成は、「Television and Popular Culture」「History of Irish Photography」から「Reporting

International Conflict」などへと、現代社会を発展的に学んでいくこと、歴史への基礎学力を得ることなどを通じて、メディアの仕事に関わっていくための知識獲得の機会を優先できるよう配慮されているように思われる。

現代社会においてメディアの発信者を目指すには、とりわけ体系的な基礎知識と学習能力とが不可欠である。実習授業においても、機材を運用する「作業」よりも大切なのは、考える、発想してみる、歴史的社会的文脈ととらえることである。こうした認識から、イギリスの学术界はさまざまなカルチュラル・スタディーズを生み出した。

本学においては数年前、「放送制作実習」などの授業展開を巡って、早くカメラにさわってみる、早くPCを使った編集をおこなってみることが学生のニーズであり、そのことに重点を置くべきであるという意見が出されたことがある。しかし、カメラや編集用PCは道具に過ぎない。たとえば、文章を書くための「word」や「一太郎」と同じレベルに位置づけられるツールの一つである。文章を考え出してくれるのは「word」ではない。これと同様に、伝えたいのはどんなことか、そのためには、何をどのように撮ればよいのか、効果的に繋げるには、といったことを考え理解していくプロセスを省略し、学生の希望やニーズとされることばかりを優先し、カメラだけを渡しても結果は知れていることとなり、ひたすら目標値を下げていくという結果につながる。それでは、「大学教育」にはならない。

訪れたイギリスのふたつの大学では、こうしたリスクを避けながら、スタディ先行に重点を置いたカリキュラムを構成している。アルスター大学では、確実にこのことをおこないながら地域メディアへの人材輩出に大きな役割を担っていることが感じられた。Ulster Televisionなどとの提携をベースに大学と放送局との共同プロジェクトがおこなわれ、学生はこうした場に積極的に参加しているようである。そして、北アイルランドという一つの文化圏に向けたメディア発信に携わるメンバーの多くが、この大学のメディア関連学部で学んでいる。学生にとって、この点においては本学のある東海地区よりも恵まれた立地条件にあると言えよう。コンテンツ制作の場が、東京一極集中型となっているわが国とは大きく異なり、地域でのメディア企業と卒業生との関係性が見られることが印象に残った。

オックスフォード・ブルックス大学においてもまた、アルスター大学にも増して講義ベースのカリキュラムである。実習系科目履修は補助的な位置づけとなっている。そして本学の「ミニ・シアター」と類似したスペースなど、プレゼンテーション施設・設備については、共通部分が多かった。

3.3 実習授業を支える人材の配置について

アルスター大学においてもオックスフォード・ブルックス大学においても、スタジオ設備などの維持管理には、比較的年配の方が関わっていた。カメラ操作、照明操作、副調整室の維持などいわゆる制作技術と機材整備に当たるテクニシャンである。今回の見学に際しては、学部教員からの依頼を受けて現場での説明に当たってくれた。教員や学生への機材運用についてのアドバイスも、

この人により日常的におこなわれている。かつて番組制作現場で技術職に携わっていた方であることが、話ぶりから伝わってきた。

制作実習のための機材に関しての本学の現状は、今回訪れた 2 校に比べればやや充実している。このこと自体は、望ましいには違いない。しかし、ハード重視のシフトがとられていることによって、スタジオや機材を使用する際における保守・設定・運用など技術面からのサポートは、イギリスの 2 大学に比べ手薄になっている。このため、制作のための設備面で若干恵まれていることが、必ずしも学生の学習成果につながってこないのである。

また本学では、実習科目の増加に伴い、様々なアプリケーションが同じ PC 内に置かれている。このことに伴い、多くの実習授業で同じ PC とスペースが共用されている。このことは学生にとって、制作実習のジャンルごとに求められるポイントの差異をわかりにくいものとしている。一斉に同じ作業での PC 活用をおこなえるという面では、効率性が高いのではあるが、このスタイルは逆に学生の興味のウェイトを PC 内の編集ソフトや作画ソフトをどのように使うのかということへと向けさせ、制作内容そのものの向上、人間系のコミュニケーションにかける時間とエネルギーの重要性をないがしろにさせる現象を惹起している。映像制作活動で最も大切なのは、調べ、考え、コミュニケーションし、ストーリーとして構築することなのであるが、この力を著しく削いでいると言わざるを得ない。PC 作業をおこなう体験そのものに興味と重点が置かれ、コンテンツの制作者としての意識にまでたどりつけていないことが少なくない。その結果として実習授業は、単なる機材の体験コースへと変容していく。PC 内の編集ソフトや作画ソフトは、あくまでツールであり、使いこなせることは主要な目標ではない。

3.4 基礎力の充実がメディア表現力を向上させる

イギリスでの 2 校の見学を踏まえ、本学の実習系授業について考えてみたい。制作実習科目は企画、立案、構成などについての基礎的な学習体験をおこなった次段階として位置づけられるべきではなかろうか。立案したプランをかたちに実現させていく手段として、制作実習をカリキュラムに取り込んでいく方が効果的である。たとえば、現状の実習科目必須 4 単位については選択制とし、基礎的な学習を通して得た成果を具体的メディア発信や映像制作・アート制作につなげたい学生のための授業と位置づけてはどうであろうか。内容を伴う作品制作に取り組む学生の増加、あるいは高レベルに到達した多くの学生の出現を見ることができれば、そのときこそがメディア表現専攻としての実質的な充実につながると考える。アルスター大学における基礎科目から発展科目への流れのなかに実習を位置づけるカリキュラム設定は、多くの人材を地域放送局やロンドンのメディア企業に送り込めることの根幹となっているのではなかろうか。

2 校の事例からも、メディアについての基礎的知識の獲得と、このことを踏まえての具体的制作をバランスよくカリキュラムに位置づけていくことが望まれる。本学における制作実習やワークショップなどの科目に求められているのは、表現者・プロデューサーとしての企画、取材、構成員をつ

ける場として機能させられるかどうかではなかろうか。学生のプレゼンテーション能力、コミュニケーション力、構想力などの育成は結果として、メディア企業以外に職を得た場合にも大きく役立つものと考ええる。

ICT時代の到来とともに、制作過程（特にポストプロダクション）で使用されるデジタル機材やアプリケーションは、日々多様化され、更新されていく。とりわけ映像編集作業では、これまでのようなデファクト・スタンダードというものが明確でなくなった。すなわち編集ソフトは、それぞれの現場ごとに同じではないのである。こうしたデジタル環境のなかで以前にも増して望まれるのは、柔軟に適応する力であり、企画を発想・構成していく力であり、社会を知る力であり、リサーチする力ではなかろうか。今回見学したイギリスの2校のカリキュラムでは、制作を担うための基礎力として、こうした学力面における要素がとりわけ明確に意識化されている。そして、意外に思えるほど実習機材面での充実に入力していない。こうした判断と選択の背景となっているのは、メディアの現場で持続的に第一線を担っていけるようになるための課題のありかについての明確な認識であると考ええる。

4. メディア教育と社会的視座の育成

小川明子

Media education for fostering sociological perspective

4.1. 視察の概要

- 視察者： 五島幸一・伊藤昌亮・小川明子
- 視察先： Boston University ; College of Communication
- 視察日程： 2010年11月10日 (MIT) , 12日 (ボストン大学)

4.2. カリキュラムの概要

ボストン大学は、学生数 32000 の大規模大学で、コミュニケーション学部がメディア関連の授業カリキュラムを設けている。コミュニケーション学部のなかに「映画／テレビ学科」「ジャーナリズム学科」「マス・コミュニケーション／広告／広報学科」の3つの学科があり、ゆるく連携している。三つの学科の学生割合は「映画・テレビ」が 20%、「ジャーナリズム」が 20%、残りが「マス・コミュニケーション・広告・広報」学科となっている。最近ではジャーナリズム学科で、ウェブ・ジャーナリズムを志す学生が増えているなど、ウェブへの関心が高まっている。

1-2年生は学科に所属せず、一般教養と学部の概論、セミナーが必修とされる。学部の概論は「コミュニケーションの世界」と題し、各教員や卒業生が授業を担当する。またそのほかに、記事などを書く際に必要となる文法やレトリックを学ぶライティングの授業が設定され、この領域で重視される文章力を高める工夫がなされている。ちなみに授業には科目番号が振られており、入門／1-2年生用／3-4年生用／4年生および大学院生用と難易度がわかれている。授業選択の際の目安となる。また制作の授業等においては、基礎クラスを履修していることが条件とされる。

3年に進級する際に、3つの学科のうちひとつに登録する。それぞれの学科にはシークエンスと称される領域が準備されており、その領域について個々に深く学ぶ。例えば「ジャーナリズム学科」の場合は、ニュース編集、フォトジャーナリズム、雑誌記事、放送レポートといった4領域が、「マス・コミュニケーション／広告／広報学科」の場合は、広告、広報、コミュニケーション論といった3領域が準備されている。

ボストン大学では、米国の大学でよく行なわれているインターンシップも積極的に取り入れており、米国各地のテレビ／ラジオ局、企業広報、広告会社などと協定が結ばれている。選抜に関しては、参加者の GPA が選抜基準となる。放送局の場合は、米国のメディア状況を反映してジャーナリズム領域でのインターンシップが多く、144時間の実習を基準としている。実習終了の際にはレポートの提出が課題とされる。

次項で述べるとおり、大学内にはニューイングランド調査報道センター (NECIR) が設置されており、そこでのインターンシップに参加する学生も多い。

4.3. 社会的視座を持たせるための工夫

ボストン大学コミュニケーション学部は、マス・メディア領域の現場出身の教員が多く、また、アカデミックな研究だけでなく、制作を多く取り込んでいる点で、本学の方向性とも重なり、学ぶところも多い。本学のカリキュラムでは扱っておらず、かつ有効であると考えられるカリキュラム上の工夫としては、1点目にレポート力の養成がある。メディア表現の現場では、たとえ報道分野でなくとも、レポート力、すなわち調査／分析／検証を経て、一定時間／字数で伝える能力は、基礎的スキルとして必要とされる。また、ライティングの授業等も含め、こうしたレポート力や表現力の向上を目指したクラスでは、扱われる素材を通して教養を深め、社会問題に興味を持たせることが可能になる。メディア環境が大きく変容した現在においても、文章力、すなわち構成力や表現力は、ウェブ、テレビ、映像などにおいても基礎力として重要である。さらに、相手に伝えることを意識することで、事象を精査し、視野を広げる意味もあるだろう。レポート力の向上をめざすカリキュラムは、社会的視野を広げる意味でも有効であるように思われる。

同様に、概論の授業でも、それぞれの教員が説明をする際に、なるべく時事問題を初めとした題材をテーマとして扱うことによって、社会的な視点を織り込むように工夫されているという。社会に目を向けるための授業をわざわざ設けるのではなく、個々の授業で扱う素材に工夫をこらすというのも学生たちに社会的視座を身につけさせるために有効、かつ効率的といえるのではないか。

また2点目に、大学内にNPOを抱えるという試みも非常に注目されている。学生たちにインターンシップや仕事を提供し、そこでプロフェッショナルなジャーナリストから直接取材方法等を学び、実際に取材することで、さまざまな限界やジレンマを経験しながら考察を深めるという表現学習上の循環も可能になるだろう。ボストン大学に限らず、昨今ではアメリカの企業ジャーナリズムの苦境によって困難となっている医療ジャーナリズムや調査報道もNPOで担おうとする動きがあり、それらと大学が連携する試みが生まれており、注目されている。

※ 「ニューイングランド調査報道センター (NECIR)」

インタビュー対象者 Joe Bergantino (ディレクターシニア／レポーター)

ボストン大学コミュニケーション学部の一室に、ニューイングランド調査報道センターがある。現在、米国のジャーナリズム、とりわけ新聞が、ネットメディアの普及や、フリーペーパーの急激な増大によって、経営上の危機を抱えていることが話題になっている。ジャーナリストが各地で大量に失職しており、ローカルな調査報道(Investigative report)がおろそかになることが危惧されている。

そこで設立されたのが、ニューイングランド調査報道センター (NECIR) という非営利組織である。中心になったのが、今回、インタビューに答えてくれたディレクター兼シニア・レポーターのジョー・バーガンティーノだ。彼はボストンを中心に30年のテレビ記者の経験を持つ。ボストン大学から施設や機器、光熱費等の提供を受け、その学生をインターンシップで採用することによって、既

存商業メディアが十分に対応できない調査報道を専門的に行なおうとする NPO として設立された。ここで取材され、書かれた記事は、各新聞やラジオ、ウェブサイトなどさまざまなメディアに売られ、これまでもいくつかの特ダネを既存メディアに提供してきた。また新しいメディア報道のありかた（ハイパー・ローカル・ニュース）も模索されておりその点でも注目されている。

NECIR は、ボストン大学のインターンシッププログラムも担っているほか、高校生やジャーナリスト向けにセミナーを行っている。そこでは、統計調査や分析、調査報道の方法、マルチ・メディア表現等を学ぶ単位獲得型コースが準備されている。学生たちはジャーナリストの仕事を間近で見、自らも取材を試みることで、否が応にもニュースの生成過程を、そして社会問題を体感することになる。

■ MIT オープン・コース・ウェア

大学の持つ知を一般社会に開放していくことが大学の社会的貢献として求められるなかで、授業のシラバスやツールを、誰でも使えるようにウェブ上に公開する「オープン・コース・ウェア」が注目される。MIT は、2001 年にオープン・コースウェアを最初に公開した大学であり、各方面から注目されている。2011 年 4 月までに公開した授業は 2000、閲覧者はのべ一億人を超えている。基本的にはどの授業も無料で公開され、また世界中の非営利教育で使用できるよう権利関係が処理されている。

MIT におけるメディア・コミュニケーション関連の授業は、Comparative Media Studies や Media Arts and Sciences といった学部の、Introduction to Media Studies, Media and Method といった授業概要が載せられているほか、Media, Education, and the Marketplace という授業では、今回訪問した宮川繁教授監修のビデオ講義が掲載されている。

オープン・コースウェアは、MIT 以外でも世界的に広がる潮流であり、日本でも日本オープンコースウェア・コンソーシアムが設立され、加盟大学も増えている。大阪大学コミュニケーションセンターや京都大学学術情報メディアセンター、また東京大学のオープン・コースウェアにメディア関連で役立つ素材や授業案が掲載されている。教員一人では準備しきれない映像や素材が利用できる他、国際比較も可能であり、学生の関心を海外に向けたきっかけとしても活用できるだろう。

5. まとめ—成果と今後の課題

五島幸一

Summary and Discussion

今回行った海外の大学の調査報告が指摘しているように、それぞれの大学のメディア教育には特徴が見られる。アルスター大学は実習用の施設も充実しており、実習と理論の授業をうまく組み合わせている。ここでの理論面での教育のベースはカルチュラル・スタディーズであり、英国のメディア教育の典型である。一方、オックスフォード・ブルックス大学は講義ベースの教育であり、講義はコミュニケーション論を中心に展開している。実習の授業は補助的なものであり、その施設は簡素なものである。また、ボストン大学はコミュニケーション学部でメディアの授業を展開している。実習用の施設は充実しているが、授業は講義が中心となっている。

5.1 情報発信できるための教育

今回の大学視察の目的は、学生に社会的視座を持たせ、自ら情報を発信できる力を養成する教育のあり方を考えるものである。そのために、海外の大学、とくにメディア教育の充実を目指している英国とアメリカの大学を視察することとなった。調査対象を英国とアメリカとした理由は、両国が異なった教育のディスプリンを有しているため、教育の違いの有無も知りたかったからであった。しかしながら、前述したように、カルチュラル・スタディーズからメディアを考える教育とコミュニケーションという観点から教育を展開する教育と、その内容には差異はあるが、いずれも、学生に幅広い視野を持たせること、そして社会的な観点から情報を発信できる力を養成することを重視している。

視察した大学の教育内容において共通していることは、講義を重視していること、そして実習（制作）は講義の内容を理解し、また応用できるように支援する補助的な存在として位置付けていることである。今回視察した大学の中で最も実習施設の整ったアルスター大学でも講義を重視しており、実習科目は少なく、学生の自主活動に任されていることが多い。一方、講義科目の数は多く、細分化されている。また、多くの卒業生は BBC はじめ、中央・地方の放送局、新聞社など、メディア関連の企業に就職している。メディア業界で就職するには、実習で培う技術ではなく、発信する情報のコンテンツを考える力を重視している。

この講義重視の教育はアメリカのボストン大学のカリキュラムでも明らかであり、たとえば、コミュニケーション学部の1・2年生には次の科目が必修になっている。

① COM C0101 The World of Communication

「コミュニケーションの世界」と称して、各教員、卒業生による概論

② COM C0102 COM Student Seminars

「セミナー」4つセミナーから3つの履修が必修、内容はレジメの書き方、企業家への模擬イ

インタビュー など

③ COM C0201 Introduction to Communication Writing

「ライティング」文法や修辞などを学ぶことで、文章力を高める。

このように、コミュニケーション学の基本的な学習として、レポート作成、および表現力を高める授業が展開されている。このような基礎力がメディアを学ぶ学生には必要だとしている。コンテンツの企画、構成、および発信をしていくには、ストーリーを作り上げる能力が必要になる。この能力はこのような基礎力、また教養そして専門科目の授業を通じて身に付くものであり、講義の大切さが問われる。

5.2 将来に向けて

実習の教育については、基本的な技術を身に着けることが原則である。ハードおよびソフトの進化のスピードがかなり速い現在では、学生時代に習得した技術では、卒業しても役に立たないこともある。そのことを考えると、先端的な技術を教える教育ではなく、どのような変化にも対応できる基本的な技術を身に着ける教育の方が重要だと考える。通信技術の発達についていくのではなく、どのような変化も受け入れて、自ら対処できる力をしっかりと身に着けることであり、そのためには基本的な技術を熟知することが求められる。したがって、実習科目の提供にあたっては、高度なソフトの使用よりは、基本的なソフトに絞り込んで授業を展開した方が望ましい。また、基本を教えることで、学生たちの自主的な学習活動を促すことにもなる。

一方、講義科目に関してはレポートの書き方、調査の方法、分析の仕方など、メディアの勉強に必要な基本的な事を学んだ上で、専門的な事を系統だって学ぶことが望ましい。前述の報告の中で、レポート力、基礎力と指摘しているのは、まさしく、学ぶ必要がある基本的な事項である。これらを踏まえて考えると、1・2年生には基礎力を習得できるような科目を設置することが望まれる。

2年生以上に開講する専門科目では、多角的にそして専門的に物事が捉えられるように、授業を展開しなくてはならない。今回の視察の結果を考慮すると、次のような専門領域を設定して、科目を提供することが1案である。たとえば、「ジャーナリズム領域」「テレビ&映画の映像系領域」「広報・出版系領域」「ニューメディア系領域」である。しかし、日々目覚ましく進歩しているメディア状況を鑑みると、このような領域設定も常に変更していかなければならないと考える。

メディア教育の難しい点は、常に変化している世界に合わせながら、基礎的な力を養成し、また多様な視点を学ばせるということである。そのことは、マスコミュニケーションの研究にも現れている。アメリカにおけるマスコミュニケーション研究も、その多様性を重視している。近年のマスメディアの発達によって、マスコミュニケーション研究の重要性が増してきたため、1984年3月に全米コミュニケーション学会から、新たな学会誌として *Critical Studies In Mass Communication* が発刊された。この学会誌はマスコミュニケーションだけに關係する研究を取り扱ったものである。それだけ、マスメディアにかかわる研究には多様性が問われることを物語っている。

その創刊号の編集記には、マスコミュニケーション領域での新たな前提またはテーマでの再分類

化が必要だとの見解を示している。多様なアプローチが存在するマスコミュニケーション研究では、どれか一つのアプローチに誰もが賛成だとは考えられないとして、その研究の発展には多様な視点からの対話 (dialogue) が必要であると説いている。(CSMC, 1984, vol. 1, No. 1) そして、この分野にとってはこの雑誌が発刊されたことは、“…the appearance of CSMC should signal a time of celebration for all us who share an interest in mass communication research.” (CSMC, 1984, vol. 1, No. 1) と結論付けている。

このように研究面での多様性が重視されることは、教育でも多様性を考慮する必要が生じる。それ故に、どの領域をどこまで教育として提供できるかを常に考えなければならない。しかし、実際には、幅広い教養と社会問題に興味を持たせる教育をすることが大前提である。